

クラーク室内管弦楽団 第27回演奏会

“夏の夜の夢とドイツ・ロマン派音楽”

2012年8月29日(水) 19:00 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

F. メンデルスゾーン (1809-1847)

「夏の夜の夢」序曲ホ長調 Op. 21

L. v. ベートーベン (1770-1827)

バイオリン協奏曲ニ長調 Op. 61

バイオリン独奏：大久保瑠加 (歯学部卒)

F. P. シューベルト (1797-1828)

交響曲第4番ハ短調「悲劇的」D417

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595

(工学研究院・フロンティア化学教育研究センター 下川部雅英)

プログラム・ノート

作曲家が残した作品が忘れ去られてしまうか後世まで残るかは、作品の質そのもの以外にもさまざまな社会的な要因や偶然に左右されることが多いようです。有名なところでは、その死後（1750年）古臭い音楽として急速に忘れ去られたヨハン・セバスチャン・バッハでしょう。1829年に20歳の青年作曲家メンデルスゾーンが「マタイ受難曲」を演奏したことにより、バッハは「再発見」されたのです。また、バッハの無伴奏チェロ組曲は、それまで学生用の練習曲としてしか認識されていなかったものを、カザルスがプロの演奏会で取り上げるにたる名曲として「再発見」（1900年頃）したことによって、今日世界中で演奏されるチェロのスタンダードナンバーになったと考えられています。

生の演奏会というものは、実は演奏者にとっても聞き手にとっても、そこで演奏される曲の「再発見」の機会であると考えられます。もちろん初めて出会う曲もあるでしょうが、何度も聞いたことがあるなじみの曲であっても、生の演奏はこれまで一度も聴いたことのない新しい体験となります。生の演奏とはその場所でその時にしか立ち現れない音楽との「一期一会」の出会いの時間なのです。「こんなにつまらない曲だったかしら？」という（演奏する側にとっては冷や汗ものの）再発見もあれば、「こんな響きもあるのか！」といううれしい再発見もあるでしょう。

本日の一曲目は、バッハを再発見したメンデルスゾーンが17歳の時に作曲した「**《夏の夜の夢》序曲**」です。これはシェイクスピアの同名の戯曲の付随音楽であり、当時から好評を博し、特に序曲は「忘れられる」ことなく今日まで管弦楽曲の重要なレパートリーとして残っています。

ベートーベン作曲の作品の中で、「**バイオリン協奏曲 二長調**」はこの点で、少々興味深い経緯をたどります。すなわち、この曲は1806年の初演後、しばらくの間まったく忘れ去られてしまっていたのです。作曲が遅れ初演本番でソリストのクレメントは楽譜を見ながら初見で演奏しなければならなかったそうで、そのこともあってかあまり評判にならなかったことが原因のようです。19世紀の後半に、ヨーゼフ・ヨアヒムがこの曲を再評価し演奏会で盛んに取り上げたことが、この曲の「再発見」につながったわけです。

本日最後に演奏するシューベルトの**交響曲第4番《悲劇的》**も作曲は1816年と推定されていますが、その時に実際に演奏された形跡はありません。初演（「再発見」）は1849年（シューベルトの死後20年以上たってから）に、ライプツィヒで行われています。「未完成」や「グレート」などの後期の交響曲ほどポピュラーではありませんが、第3番までとは異なり、シューベルトが「新しい響き」を求めようとしていることが随所に見られます。アーノルド・フェイルによると「ここでの「悲劇的」とは哀感（pathos）やカタルシスよりは、敵対する力に立ち向かい克服してゆく「苦闘」の意味合いが強い」ということです。本日の演奏が、シューベルトの新しい側面の「再発見」になれば幸いに思います。

奥 聡（メディア・コミュニケーション研究院）